

チュートリアル「多人数インタラクションの分析手法」 第6回で取り上げる問題

高梨 克也
(京都大学)

坊農 真弓
(日本学術振興会, 京都大学)

第3回から始まった個々の分析概念についての紹介は今回が最後になる。これまでに取り上げた分析概念については、使用されているモダリティや単位の大きさ、背景となる理論などはさまざまであったものの、観察される現象を時間的側面から分析することを目指したものであるという点では基本的に共通していた。これに対して、今回取り上げる参与構造やF陣形といった概念については、時間的側面も重要であるものの、インタラクションの行われる空間の区分をイメージすると理解しやすい。

高梨の「参与構造」では、多人数インタラクションの中の参加者の役割関係について分析するための理論的概念を紹介する。まず、三人以上の参加者のいる会話では、「いつ話者が交替するか」(第4回榎本論文)だけでなく、「誰が次の話者になるか」が重要になるが、その際に参加者がどのような手続きを用いているかを概観する。次に、次話者を選ぶという問題と関連して、複数の聞き手の間の役割の相違を分析するための枠組みとして、聞き手の参与役割の分類について論じる。さらに、次話者やその他の参与役割の決定のためにどのような言語的・非言語的手段が用いられているかを紹介する。最後に、話し手と受け手を中心に据えた「会話の内側から」の分析とは対極的な考え方として、会話の境界の画定といった現象を扱うための、「会話の外側から」のアプローチも重要であることを指摘し、こうした状況をインタラクションの焦点や活動への関与という概念によって分析する方向性を紹介する。

坊農の「F陣形」では、インタラクションを「外側から」分析する方向性が全面的に追求されている。高梨論文が分析概念の理論的な説明という側面が強いものであったのに対して、坊農論文では、身体の姿勢や方向を具体的に観察するための分析概念としてF陣形について紹介する。F陣形は会話参加者が各自の操作領域を空間的に重ね合わせるようにして形成・維持される身体配置・方向であることを図解で示す。また、身体姿勢や方向を分析するためには、実験室環境ではなく実世界で実際に生じた行動を対象とすることが重要であることを指摘する。さらに、情報媒体のある会話場面やネットワークを介したコミュニケーションでの身体姿勢の変化についても論じる。身体の姿勢や向きといった観察対象は、専ら空間内での身体の物理的位置に関わるものと見えるかもしれないが、重要なのは、インタラクションの参加者が進行中の活動を行いやすくするために身体を相互に調整し合っており、そこには空間を形成する際の時間的構造

に関する課題が含まれているという点である。

最後の岡本雅史氏による「実践：漫才対話のマルチモーダル分析」は当初は予定されていなかった記事の追加である。「参与構造」や「F陣形」の概念は、社会学や人類学の分野では以前から盛んに用いられていたものであるが、人工知能分野への応用は始まったばかりで、必ずしも多くの先行研究が存在するわけではない。そこで、これらの分析概念についての理解を深めるのに適切な対象として、漫才というインタラクションに着目し、すでにこうした分析の試みを展開していた岡本氏に研究紹介をお願いした。インタラクションとしての漫才の構造的な特徴は、一方で実際に会話をしているのが演者のみであるにもかかわらず、他方でこの会話が専ら観客に見せるためのものであるという点にあるといえる。岡本論文では、こうした特徴的な形態のインタラクションを「オープンコミュニケーション」と呼び、観客の聞き手役割を傍参加者と傍観者の区別という観点から検討するとともに、演者がコンビの相手と観客の両者に対してもっている二重の指向性が身体姿勢や視線方向といった非言語行動にどのように表れているかを観察している。

以上のように、参与構造やF陣形は多人数インタラクションの空間的な広がりについて分析するためのものであるが、その一方で、単にインタラクションのある瞬間に見られる参与役割や身体姿勢を静的に分類するだけでなく、これが参加者間のマルチモーダルなインタラクションを通じて形成・維持されていく際の微視的な相互調整過程の時間的コンテキストを重視した分析が必要になる。さらに、多人数会話における参与の相互調整は会話の構造と無関係に行われるものではなく、隣接ペア(第4回伝論文)や談話セグメント(第4回竹内論文)といった会話活動の言語的構造と時間的に同期し、相互参照的な関係をもっている。この点は、ジェスチャーが言語による発話や談話の構造と有機的な統合関係をもっている(第5回細馬論文, 古山論文)ということとも密接に関係している。このように、インタラクションの構造をさまざまな粒度・モダリティでの複数の振る舞いの間の相互関係という観点から分析する方法論を提案することが本チュートリアルの狙いである。

なお、今回は、第6回までの執筆者が「言語・非言語コミュニケーションからマルチモーダルコミュニケーションへ」というタイトルで行った座談会の内容に基づいて、これまでに紹介してきた分析概念の間の相互関係や今後の研究上の課題を提示する予定である。